



【戦後80年 語り続ける写真たち ～公文書館一帯は陸軍駐屯地だった～】

その1 公文書館と陸軍駐屯地

私たちの社会、暮らし、そして心に大きな傷を与えた戦争が終わって80年。その戦争を体験された方々が少なくなっていく中で、どのように「戦争」を記憶していくかが重要な課題となっています。改めて当時の資料を見直してみると、様々な資料が戦争への足跡を伝えていることに気が付きます。

公文書館が入る「豊の国情報ライブラリー」一帯は、戦前、陸軍の駐屯地でした。

画像①は昭和9（1934）年に発行された「大分市新地図」という、当時の大分市域を一望できる地図です。

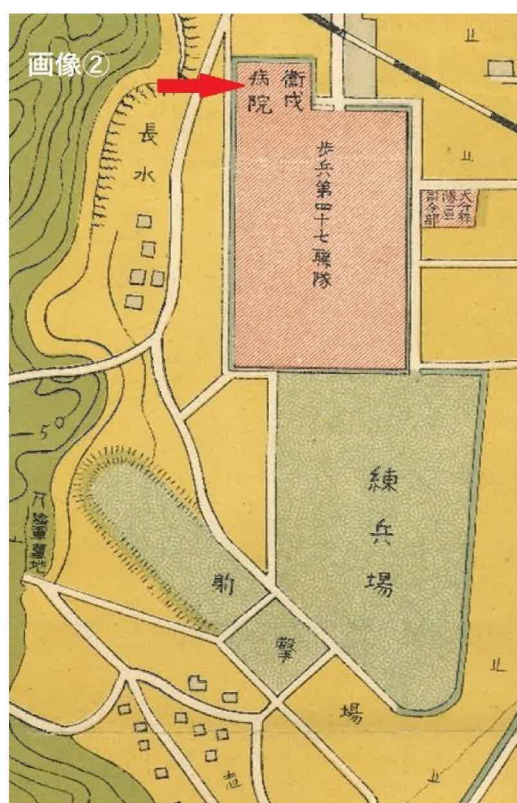


赤丸で囲んだ部分が大分連隊で、その拡大の画像②に赤矢印で示した“衛戍（えいじゅ）病院”
＊に豊の国情報ライブラリーは建っています。

＊衛戍病院：陸軍付属の病院

明治41（1908）年7月、陸軍歩兵第72連隊が駐屯を開始しました。

大正14（1925）年4月、宇垣軍縮により廃隊となりますが、同年5月歩兵第47連隊が小倉から移駐、新たな大分連隊は大分県のほとんどの地域からの兵士を管轄し（日田郡は久留米連隊区）、兵士はこの地に召集され、ここから出征して行きました。



画像③は、陸軍歩兵第47連隊への入営（軍隊に始めて入ること）時の風景です。

「祝」の字や入営する人物の名前と部隊名などが書かれ、日の丸・日章旗も描かれた多くの幟が画面いっぱいにはためいています。

入営は1月に行われるのが一般的で、人々はトンビ（和服用コート）やコートを羽織り、女性はショールを肩にかけていますが、寒さより熱気が伝わってくるような情景です。

当時、軍隊に入るとは義務であり名誉とされていたのです。

この写真は、練兵場の東側（地図の右）から撮られたと思われ、幟の彼方に見える西側の丘陵の姿は現在も変わりません。

資料

- ・「大分市新地図」 昭和9（1934）年 大分情報局発行
- ・「大分県関係（古写真）」より「〔第47連隊入営風景〕」 昭和戦前期

参考文献

- ・大分県史 近代篇Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、現代篇Ⅰ